兒童と社會訓練

東京高等師範學校教授　依田新

一

子供といふものは私等の世界では特別扱ひを受けて居る。子供が電車の中で何か分らずを言つて泣き騒いでも、餘程我々の神經が焦立つてゐる時ででもない限り、うるさいと言つて、叱りつける人はゐない。又何か子供が惡戯をしても子供だからといふ理由で大抵は默許される。卽ち、我々は子供の世界と大人の世界とは全く異つたものだといふ考を一般に持つてゐる。だから大人の世界のプリンシプルを子供の世界に持ちこむことを遠慮してゐる。勿論、この樣な考へ方は比較的新しい考の方であつて、これには最近の兒童心理學の發達といふ樣なことが非常に影響してゐると思ふ。だから我々の父或は祖父等が未だ子供であつた時分には今日の樣な子供の安全地帶はなかつた。卽ち、少し前の社會の持つてゐた兒童觀では子供は厄介物であり、できるだけ早く一人前の大人にすることが必要であつたので、大人の世界の秩序を子供が理解すると否とに拘らず子供に强制してゐた。それが約半世紀の間に社會の兒童觀といふものがすつかり變つてしまつた。もう今日では子供は小さな大人であるといふ樣な考へ方を持つてゐる人は、少くも教養ある人々の中には一人もないと言つてよい位である。

この二つの極端な兒童觀のどちらが正しいかは輕々に決定しかねる問題であるが、兎に角夫々にかかる兒童觀を生んだ所の社會的必然性を擔つてゐたといふことだけは事實である。新しい社會は常に新しい兒童觀を作り出して來る。だからこそ兒童竝に婦人に對する社會的關心の程度によつてその國の文化水準が知られるとさへ言はれるのである。今日は日本を中心として世界の體制が大きな變化をなしつゝあるが、かういふ樣な社會の變革期に於てはそれが兒童觀にも反映せざるを得ない。その顯著な現れの一つは學制改革への機會である、或は教育問題への社會關心の昂揚である。何故ならば教

育組織といふものはその社會の持つ兒童觀の具體化された形であると見ることが出來るだらうから、從つて既に出來上つてゐる教育組織を變革しようとする動向の背後には既成兒童觀の動搖といふことが看取される。

即ち、子供は大人とは全く別なものであるといふ所謂新らしかつた兒童觀が今日色々な點で問題にされかかつてゐる。例へば「子供は國家の子供である」とか「日本の子供は日本の國民にしなければならない」とか言ふ樣な言葉を我々は屢〻耳にきいてゐる。子供は決して子供の世界にほつておかれてはいけない。どうしてこの子供等を次の國民に育て上げるかといふことが新らしく興らうとするものにとつて重大な關心を惹くことは當然である。こゝに社會の子供への働きかけとしての子供の社會化或は社會的訓練といふことが當面の問題となつて來た譯である。

二

而してこの子供の社會化といふことには色々の問題が起つて來る。若し從來考へられてゐた樣に、子供は子供の世界に住んでゐて大人の世界とは全く別な天地であるとすると、大人の要求する道德、即ち、我々の社會生活上の色々な約束を子供の世界に持ちこむといふ事は不可能になる。のみならず、その子供の世界の根本的特徵は自己中心主義といふことであつて、自己に屬するものと然らざるものとの未分化の爲に何でも自分を中心にして考へるものであるとすると、子供等自身も未だ眞の社會生活といふものを持つてゐないといふことになる。こゝに子供の社會的訓練の困難さが倍加されてゐる。

そこで我々は一應子供の自己中心主義を認めると同時に、どうしてそれを社會化して行くかといふことを考へなくてはならない。即ち、子供は大人ではないが、どうして彼等を大人にするかといふことを考へる必要がある。その爲に私は子供の世界と大人の世界との接觸する面——たとへ子供の世界が大人の世界とは全然別なものであつたにしても、彼等が我々大人の社會に生活して行き得る爲には何等かの接觸面がないことはない——を考へて見よう。その樣な接觸面で最も重要なのは家庭であり、その他學校(幼稚園を含めて)、子供雜誌、ラヂオ等々があげられるであらう。

家庭に於て、親は大人の世界を代表して子供の世界と接觸してゐる。こゝに家庭を通じて、大人の世界の秩序を徐々に子供に理解させ得る可能性がある譯で、家庭の躾けが子供の社會的訓練の爲に非常に重要な役割を持つことになる。所が實際には却て家庭が子供の我儘を增長させる場所になつてゐる。親は大人の世界を代表して子供の世界を否定するものと

してよりは、寧ろ二つの世界の境目にゐて子供等の世界に加へられる所の大人の世界からの壓力を防いでゐる樣な役目をしてゐる。一體完全な自己中心主義はこの現實の世界から完全に遊離されてゐて始めて存在し得るもので、親によつてかばはれてゐる家庭の中こそかかる場所に近いものである。從つて家庭は子供の社會化の機能よりも寧ろ子供の自己中心主義を保護し育成する機能を行つてゐる。

勿論、家庭のこの樣な機能は子供の健康な發達の爲にある程度迄は必要である。かの勞働者階級の子弟の場合の樣に、兩親が共に外に働きに出てゐるとか、家が狹すぎるとかで、子供等が街頭に空地に直接に現實の大人の社會にさらされてゐる樣な場合には子供の自己中心主義は比較的早くなくなるといふ事である。かういふ子供等は可成り早くから生存手段を獲得し、社會的適應を示すけれども、即ち、早く大人にはなるけれども、觀念內容が兎角貧弱になり易いと言はれてゐる。この事から考へても、子供の世界と大人の世界との接觸は成るべく間接的である方が望ましいと言はなければならない。從つて社會は家庭のない子供等の爲に、あつてもその機能の不十分な子供等の爲に、一定の施設を設けて彼等を大人の世界からの壓力から護つてやることはたしかに必要である。

かくの如く家庭の中に親によつてかばはれる事によつて子供の世界には我々の目に餘る「我が儘」が出て來ると同時に、子供は子供として健全に育てられもする。こゝに一般に、子供の世界と大人の世界との接觸面にある所の、親、教師、保姆及び子供に對する諸文化施設等の重要な教育的機能が存在する。下手をすれば、手のつけられない我儘にするか、或は子供らしい健康を失つた小さな大人を作つてしまふ。即ち、之等の教育機關はある程度迄子供の世界を大人の世界から守つてやると同時に、大人の世界を子供の世界に仲介することに依つて彼等を社會化する機能を十分に發揮しなければならない。この點が今日家庭教育が問題になり、子供の雜誌が問題にされてゐる所以である。

三

所が、家庭ではどうしても親は必要以上に子供をかばひ、子供は又親に依存するといふ結果になつて十分な社會的訓練は困難である。大體、社會意識といふものは、自分の能力に對する抵抗を感ずる所から發生する。自分の欲するものが常に親によつて與へられるといふ樣では、自分に抵抗する自己ならざる世界といふものが意識されない。從つてかゝる場合にはいつ迄も自己中心主義が持ちつゞけられて行く。夫故に色々な事をすべて自分でやらなければならないといふ事にな

るこ、自分には出來ない。自分の思ふ樣にばかりにはならない世界が體驗され、それによつて今迄の自己主義が次第に破壞されて行く。自己中心主義の破壞こいふ事は卽ち社會化に他ならない。

併し乍ら、こゝで注意すべきことは、子供に外界の抵抗を餘りに屢〻經驗させるこ、子供は自分の無力感、劣等感を强く意識する樣になり、その劣等感から逃れようこして自分の圍りに壁を作つてしまひ、外部この交渉を絕ち自分獨りの空想の世界をこしらへ上げてしまふ。かうして反社會的になつてしまつた子供が時々あるから餘程注意しなければならない。子供の非社會性を餘りに早く社會化しようこして却て反社會性を作り上げることは屢〻見られることである。

さうするこ、一般に家庭は子供にこつて餘りに安全地帶でありすぎるし、さうかこ言つて彼等を餘りに早く大人の世界に馳りたてることは又子供を健全に發達せしめるものでないこするこ、子供の社會訓練はどうしたらよいであらうか。

それには子供こ大人この生活の他に是非子供こ子供この生活を與へることが何よりも必要である。家庭に於ても兄弟が多い場合には子供同志の生活が營まれる譯であるが、そこでは兄こ弟こいふ樣な上下の關係があつて對等の社會關係にならない。從つてその爲にはどうしてもその樣な場所を家庭外に求めなくてはならないが、こゝに幼稚園こか托兒所こか言ふものが兒童の生活訓練にこつて是非必要な場所こなつて來る。

併し、前に述べた樣に、子供は元來自己中心的であるこするこ、子供同志の社會生活こは一體どんなものであらうか。どんな風にして彼等の社會性が發達して行くであらうか。子供の社會的訓練は子供の社會性の發達に副ふてなされねばならないから、彼等の社會性そのものについて最後に簡單に觸れておくことにする。

四

ビューラー夫人の研究によるこ、子供同志の社會的交渉は可成り早くから始まるこいふことである。卽ち生後五ヶ月位までは一人の幼兒の傍にもう一人の幼兒をつれて來ても兩者の間には何等の交渉が見られないが、六ヶ月の幼兒になるこ明かに他の幼兒の存在を意識し、それによつて影響され、何等かの形で社會的交渉が成立する。勿論この樣な社會性は極めて原始的なものであつて、果して社會的交渉こ言つてよいか問題であるが、こに角この頃より次第に子供の生活領域が分化し、擴大されて行くのである。それにこもなつて抵抗を感ずる事も多くなるのであるが、步行の自由及び言語活動の開始によつて彼等の生活領域が急激に擴大されるこ、それに伴つて抵抗を感ずることも著しくなり、その反應こして所謂

反抗を示す樣になる。ビューラーによるとその樣な反抗が顯著になるのは滿二歲頃であつて、之を第一反抗期を呼んでゐる。この時期は自我意識の最初の現れであつて教育上重要な意味を持つてゐる。

かくして子供の社會的交渉は次第に確固たるものになつて行くが、未だその範圍は極めて少く、始めの中は二人の間にだけしか社會的交渉が成立しない。外國の研究によると三人が一つの集團を作つてお互ひに社會的交渉を持ち得る樣になるのは少くも滿二歲の中頃を過ぎてからであり、一般に三歲位までは二人群以上の集團が作られることは稀であると言はれてゐる。三歲頃から漸く三人群が多くなり、幼稚園時代の集團形成は二人が一番多いといふ事は多くの人々の研究の一致してゐる所である。

併し、幼稚園のお砂場には五、六人時には十人位が一緒になつて遊んでゐるではないかと言はれるかも知れない。この事についてアメリカのバーテンといふ人は幼稚園兒童の社會的行動を研究し、このお砂場で多勢一緒になつて遊んでゐる樣に見えるのは、實は彼等お互ひに他の子供の傍で遊んでゐるといふだけで、決して他の子供等と一緒に遊んでゐるのではないと言つてゐる。彼はこの樣な現象を特に平行的活動と呼んでゐるが、丁度之と同じ樣なことをフランスのピアジェが子供の會話について語つてゐる。即ち、子供の會話には宛も他人と話してゐる樣に見えて、實際に獨り言である場合が非常に多い。會話の本質である問と答とが分化されてゐないで、兒童は他人に話しかけ乍ら、必しも他人によつて返答されることを要求せず、時には自分で答へたりしてゐる。純粹の獨り言と異なる點は他人の存在を必要とするといふ事である。ピアジェはこの樣な特殊な會話を特に集團的獨語と名づけてゐるが、本來社會的なものである言葉が子供の世界ではこの樣に眞の社會的性格を擔つてゐないといふ點に於て、子供といふものが如何に自己中心的であるかといふことを證明したのである。バーテンの平行的活動と言ひ、ピアジェの集團的獨語と言ひ、幼稚園時代の子供の社會的生活の特徵をよく示してゐるものである。

即ち、我々は之等の研究によつて子供等の外見的な社會的の活動が如何に非社會的であるかといふことを理解し得ると思ふ。この非社會性を適當な時期に、適當な方法で社會化して行くことが幼稚園に課せられた一つの重要な教育であると思ふ。唯問題はその適當な方法であつて、下手をすればこの非社會性が反社會的性格へと發展して行くことを知らねばならない。（十三・十一・三十）